

大同石佛寺の保存に就いて

小野 勝 年

日比野 丈 夫

緒 言

大同雲崗の石佛は今を去る約一千五百年前の開鑿に係り、北方遊牧民族たる鮮卑拓跋部の建設した北魏王朝が現在に遺せる當代文化の精華である。これが只に佛教藝術の寶庫たるに止まらず、廣義に於ける藝術創造の觀點に立つても、實に世界的な至寶であるといふことは今更ら論ずるを俟たないであらう。即ち、彼等北方民族の雄勁素朴なる精神が、漢文化の傳統を基調とし、西方文化を融合せしめて創造した偉大なる所産であつて、而も極東に於ける最大、最古の佛教藝術であるからである。

抑々この石佛は四十年前遇々當地を訪れた工學博士伊東忠太氏によつて學界に紹介されるや、俄然斯界の注目を惹き、内外人士の此處に至るものが漸く多く、同時にその眞價も一般に知られる様になつた。従つて今次の事變以前からも、我が識者の間に於いては既に親しい存在であつたのである。それが昭和十二年秋、皇軍の大同入城と同時に逸早くも石佛保護に關する布告となつて、その實を擧げたことは、隣邦の古代文化

を尊重する麗はしい餘裕ある態度として、一般の人々に好感を以て迎へられた。かくて從來限られた人々にのみ許された機會が、漸く許多の者に對しても與へられることとなり、その結果これが我が飛鳥、白鳳期に於ける佛教藝術の一流流であることが一般の人々にも直接知られる様になつたのである。而して、北魏藝術の偉大さが愈々廣く認められると共に、他面默視するに忍びざる現状の荒廢振りも痛感され、保存の必要が強調されるに至つたのである。

蓋し雲崗石佛に關する古文獻は寥々たるものであつて、その史的變遷を辿ることは頗る困難を覺えるが、唐の中葉に至るまでは相當に榮え、舊來の遺構を保つてゐたもの、如くである。然るに北方遊牧民族出身であつて、その部族的性質を同じくする契丹の遼朝が大同を西京と奠むるや、こゝを尊崇保護して大重修事業を興した形跡が、近時調査の結果によつて確認せられつゝある。降つて清朝に至るや、入關後間もない順治四年に伽藍を重修し、康熙帝の如きは親しく此處に詣でてゐる。かゝる事實は、北方系民族の盛衰がこの寺院の消長に鈔らざる影響を及ぼした

ことを解せしむるのである。清末以後民國初年に至るまで、勿論重修事業はあつたが、それは小規模なものであつて、東方窟群の如きは捨てて顧られず、西方窟群はこれに近接して民家が建てられ、又一部分は民家として利用されつゝあつた有様で、寺院としての生命を辛うじて維持してゐたのは、たゞ中央の諸窟のみであつた。かくて年代の経過と寺運の衰頹とによる自然的崩壊のみならず、近時古美術愛玩の風潮によつて、佛像の人爲的破壊を伴ひ、その荒廢の状態は益々増大しつゝあつた。

従つて民國以後は多くの人々にとつては宗教的寺院としての性質を次第に失ひ、過去の文化的遺産として史蹟的性質を帯びるに至つたものである。かゝる傾向は支那の政府當局者の間にも漸次認識され、従つて史蹟保存といふ立場からこれを調査し或は保護を加へて行かうといふ機運に向ひつゝあつた。蔣介石の如きも曾てこゝに至つて、相當大規模なる保存計畫を目圖したことがあるが、遂に實行の運びには至らなかつたものである。

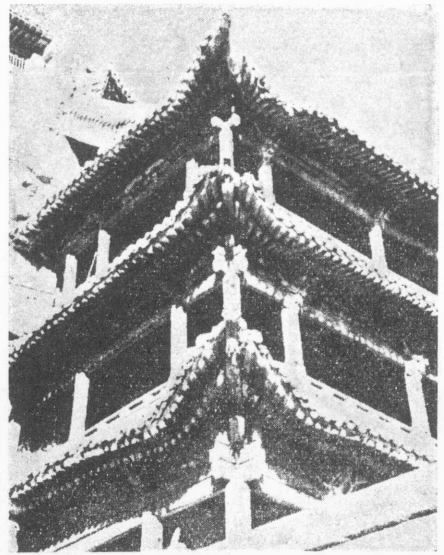
この機會に於いて史蹟そのものの性質に就いて一言したいと思ふ。

抑々史蹟とは人類が過去に於いて歴史的活動を行つた際、残された所の具體的な動かし得ざるものである。果して然らば、人類の嘗て生存したる所、それは至る所にあるべき筈であるが、而もこれは刻々として失はれつゝ行く。先人の遺した偉大なる文化的遺産といへども、やはりその規を一にする。従つてこゝに於いて偉大なる價值あるものは當然保存すべき必要を生ずるのである。何となれば、先人の偉大なる文化的遺産は、これを究めることによつて、過去に對する知識を豊富にすると共に、將來の新文化創造の糧として寄與する所大なるものなるが故である。史蹟

保存事業の意義は實にこゝにある。而して、史蹟保存事業そのものも亦現代に於ける重要な文化事業の一であり、従つてこの事業は現代文化の反映であると信ずる。かゝるが故に、事業そのものは規模の大小こそあれ、現代文化の精華を盡さねばならぬ。

さて晉北政廳に於いては、自治政府時代より、石佛寺の重要な史蹟としての價值を認め、著々保存事業を具體化し、昨年度には巨萬の費用を投じて土地を買収し、民家を移轉せしめて史蹟地域を設定し、管理處を置いて保護を計つた。殊に本年度は興亞院蒙疆連絡部から多額の補助金を得て、この衝に當つた同政廳文教科が愈々第一期の保存計畫を實施したのである。その事業は、保存、觀光、學術的調査の三點に主眼を置いたものであつて、保存工事としては、昨年度民家移轉のあとを受け、排水、整地等を行ひ、先づ外貌を整へると共に、保存の基礎的事業を實施したわけである。これと同時に、大規模な大同石佛保存協議會設立の議が擡頭し、今政廳が中心となつて、廣く内外の識者に呼びかけ、愈々これが結成の運びとなるに至つた。これは、單に限られた蒙疆地域内に止まらず、東亞全體から見ても一の偉大なる文化事業として有意義なるものと信ずるのである。

惟ふに、雲崗石窟を始め支那各地に於ける諸石窟に就いては、内外諸學者のこれを調査、研究するものが多く、既に相當なる結果を世に送つてゐるものも少くない。我が國に於いては、故關野貞、常盤大定兩博士が支那佛蹟全般に關する調査に手を染め、この方面に關してもその著名なるものは悉く調査して啓蒙的な役割を果されてゐる。然るに東方文化研究所では、昭和十一年以來、北支那石窟寺調査を企圖し、先づ響堂山



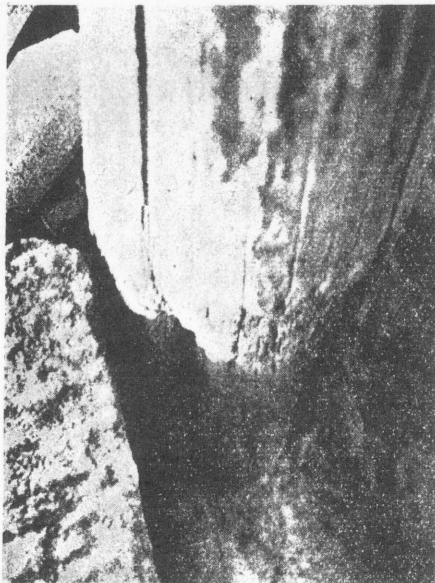
挿圖1 第六窟前樓閣各層檐狀損破の現狀

石窟、及び龍門石窟の調査を開始し、更に溯つてこの雲崗石窟の調査を計畫した。同十二年は遇々支那事變勃發の爲中止となり、翌年春に至

石佛寺の現狀と保存の必要

つて第一回の調査を行ひ、今年度は既に第三回の調査を完了したのである。かゝる機縁から我々も亦この調査に参加し、今回は更に晉北政廳の依頼によつて、保存事業の一部に關係するに至つた。その間、親しく石窟荒廢の現狀を目觀して、全般的な保存計畫樹立の一刻も忽せにすべからざるを痛感したのであつた。事の餘暇、

挿圖2 第五窟前樓閣木柱基部の腐朽現狀



挿圖3 第六窟前樓閣西側の破損現狀



自ら揣らす石佛保存計畫私案なるものを作成してみたのである。固より我々は歴史學及び考古學に従事するものであつて、必ずしもその任にあるものではない。しかし、これによつて聊かなりとも識者の眞摯なる注意を喚起し、専門家の叱正を仰いで更に完全なものとし、將來に於ける永久的保存計畫の一助ともなはばと思つて、敢てこゝに發表する次第である。

大同石佛寺の保存に就いて

てゐるのが認められる。雲崗鎮の部落はこの石窟と河流との間に存し、土城は現在では已に荒廢してはゐるが、東西二所の堡門が遺り、人家はその外にはみ出してゐる。石窟臺上にも明代には嘗て住民が生活し、ここに土城を營んだものであるが今は廢墟として形骸を留めてゐるに過ぎぬ。こゝには又數個の廟があり、石窟臺上東方の龍王廟、同西方の玉皇閣、舊部落内の關帝廟等はその主要なものである。

氣候は酷暑時には華氏百度以上にも昇り、嚴寒には零下二十度にも降る。四月の半ば頃から五月の中旬にかけては、殆んど毎日午近くから谷の中を強い西風が吹いて砂塵を巻き上げ、全く對岸の丘陵を隠してしまふ。しかしその時季が終る頃になると、到る所に柳絮が飛び、雲岡別墅の庭園にはライラックの花が秘やかな香りを放つ。夏が近づくと、そんな風はばつたりと止んで、見渡す限り澄み切つた紺碧の空があらはれ、四面の丘陵は一抹の緑に被はれる。雨季には時に豪雨に襲はれることもあるが、それは稀で、太陽はガラ／＼と直射するが、日陰にをれば涼しい。八月の半ば頃から已に秋に入り、十月一杯は毎日のやうに快適な日和で、周圍の風景は何ともいはれぬ穩かな感じを與へるのである。十月の初めから寒い日が續いて降雪を見る様な年もないではないが、十一月になつても晴天なれば暖い。しかし大抵はこの月に入ると必ず寒風は雪を伴ひ、一度降り積つた雪は來春まで融けず、武周川は氷結して、この村落にも冬眠の時季が訪れるのである。

さて、石窟は斷崖の東西約一軒に亘つて開鑿されてゐて、その配置は東と西とにある各々一つの小巷によつて分れてゐる。この西方の谷は別に名稱はない様であるが、東方は俗に龍王廟溝と呼ばれる。ために石窟

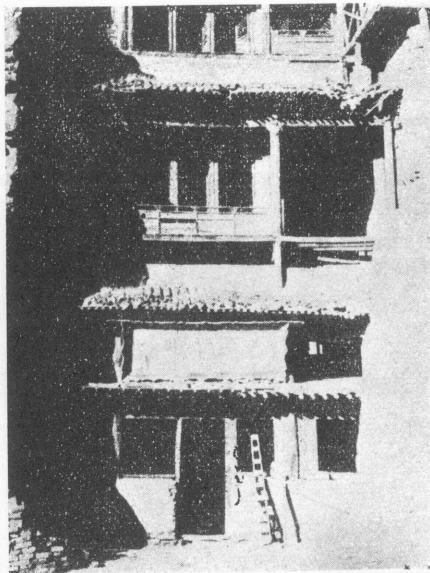
群は三分された形をとり、それを我々は便宜上、東方窟群、中央窟群、西方窟群といふ風に區分してゐる。東方窟群は石窟が比較的少數であるが、後の二者は大小合せて相當の數に上り、殊に西方窟群の西半部はその數最も多く、且つ複雑を極めてゐる。しかし、全體を通じて見るに大規模な石窟の數は二十有餘である。從來これ等の大石窟に就いては寺の所傳による名稱と、フランスの支那學者シャヴァンヌ及び我が關野博士の附せる番號とが比較的行はれてゐる。關野博士に依る番號は、現在より見れば必ずしも充分だとは言ひ得ないが、他の二者に比較すればより穩當だと考へられるし、我々も新たな名稱を設けその結果徒らに繁瑣を招くことを避けるために、こゝでは假りに同博士の番號に従ふこととする。それに依れば、東方窟群には第一窟より第四窟、中央窟群には第五窟より第十三窟、西方窟群には第十四窟以下が數へられてゐる。

次に、保存の觀點からこれ等諸窟全體をみるならば、東方窟群に於いては、第一、第二窟に補修の跡は見受けられないではないが、已に年久しく荒廢に任せ、又第四窟の如きは佛頭悉く盜取され、破壊の狀見るに堪へざる有様を呈してゐる。中央窟群は緒言に於いても觸れた如く、寺院の中心となつてゐて、こゝには建築物等も現存し、人爲的破壊の跡は比較的少ないが、これ又風化等による自然的破壊は免れなかつた。従つてこれをその儘放任するに於いては、近き將來に於いて崩壞の憂ある箇所も少くない。尙、建築物の如きも至急重修の必要に迫られてゐる有様である。西方窟群も嘗て恐らくは遼代の頃、その前面に樓閣が設けられ、一面に石窟保護の役割をもなしてゐたと思はれるが、これは早くも倒壞して近世に於いては重修せられた形跡もなく、上述した様に近接し

て民家が建てられ、又一部分は民家として利用されてゐた様な有様であつた。しかのみならず、こゝには泥盤岩質の脆弱なる岩層が現はれて自然崩壊の度を早め、而もその傾向は西半部の小石窟群に於いて最も甚だしく、恰かも下部を剔りとられるが如き状態を呈してゐる。

此處で又一應我々の保存計畫私案の作成に當つての立場に就いて一言する必要があるであらう。即ち、史蹟保存といふ觀點に立つてこれを何處までも愛護し、現代のみならず永久に傳へて、後世に偉大なる北魏文化の眞髓を直接

知らしめんとするにあるのである。かゝる立場は石佛の保存といふことに對して、必ずしも唯一のものでないかも知れない。

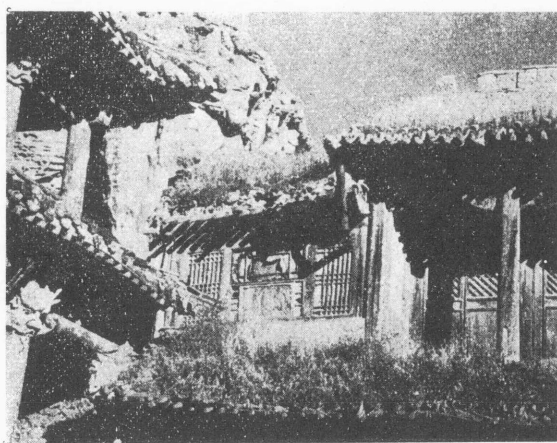


態狀損破の閣樓前窟第七 4 圖挿

例へば、宗教的な禮拜對象としての立場、或は藝術的鑑賞の對象としての立場等が當然考へられる。前者は禮拜の對象として、佛像及び石窟の補修に重點を置くものなるが故に、藝術的價值は自ら無視され勝ちとなり、後世の俗惡なる補修の跡が、藝術的鑑賞の立場からする者をして特に嫌惡の念をすら生ぜしめる様な結果を招いてゐる。その補修方法を見るに、或は表面に厚き泥を被せ、或は紙を張りて漆を塗り、或はこれにけば／＼しい彩色を施して、佛像を修理し、壁面を補ふが如きである。

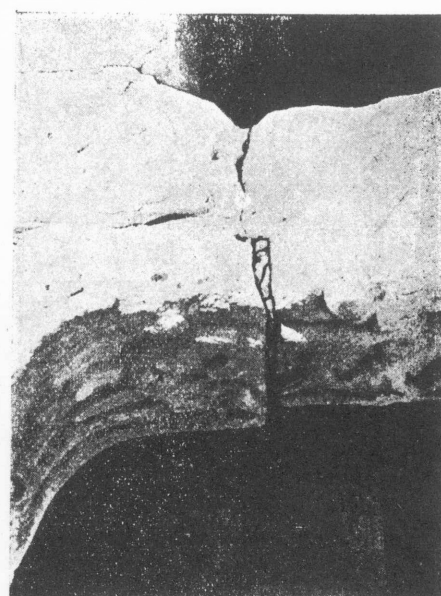
大同石佛寺の保存に就いて

この例は中央窟群に多く、特に第九窟より第十三窟に至る所謂五花洞に於いて最も著しく伺はれる。しかし、かゝる立場も亦過去に於ける信仰心より發する所として、我々もそれに理解を持ち、或程度これを尊重するものである。次に藝術的鑑賞の立場に就いて考へるならば、創建當初のまゝに置き、後世行はれた重修の如きは最も排斥する態度である。それは時に風化して破壊した斷崖の間から千古の佛像が可憐なる姿をのぞかせてゐるのを樂しみ、



閣樓前窟第五第は左てつ向 態狀損破の閣音觀 5 圖挿
る居てい傾に既に先檐亦もれこ

物保存の意味に於いても亦考慮さるべき問題であらう。我々は出來得る限りこれ等各種の立場をも尊重せんとするものであるが、しかし上記の如く何處までも史蹟保存の立場に立つものであることを明らかにしたい。以下、各石窟の現状を詳細に述べ、これが保存對策を各項目に分つて述べるであらう。



部裂龜の部上口入窟一第 6 圖挿

保存計畫 私案

- (1) 石窟の保存
に關する工事
一、木造建築
に關する事
項
一、石造建築

重修を経ないので腐朽の度甚だしく、この儘放任するに於いては、倒壊の憂も近きにあることと考へられる。各樓閣に就いて補修箇所細目を舉げれば左の如くである。

A、第五窟前樓閣 同樓閣に就いては屋根の部分は、葺板及び檼の改裝、瑠璃瓦の補給。又床板の補強、階段の改築、屏及び欄干の修繕、腐朽せる柱の取換へ。〔挿圖2・5参照〕

B、第六窟前樓閣 前項に同じ。尙、當樓閣には康熙帝の御筆になる莊嚴法相の四字の額がある。これは當時の諸文獻にも記載されてゐるものであり、且頗る名筆として貴重なるものであるから、至急特別の保護を加へねばならぬ。〔挿圖1・3参照〕

C、第七窟樓閣 同樓閣は三樓閣中腐朽最も甚だしく緊急修理を要するものである。屋根、屏、柱、床板等、現状の儘では存續全く不可

に關する事項

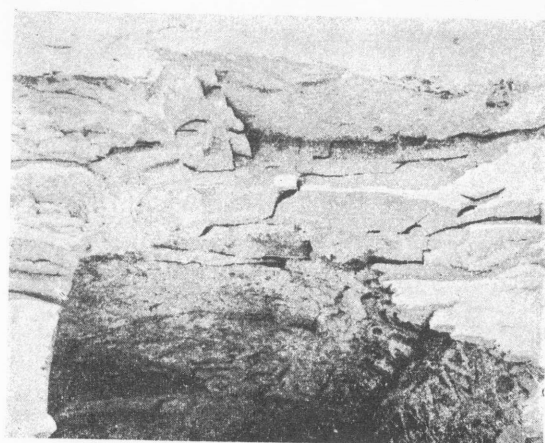
一、其の他

(2) 觀光その他に對する施設

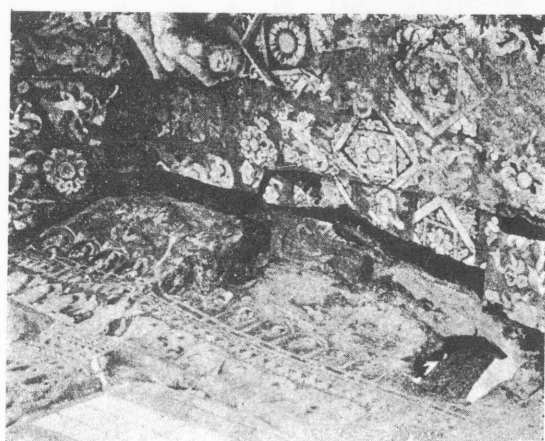
(1) 石窟保存に關する工事

- 一、木造建築に關する事項
イ、樓閣の重修

現在樓閣を架せられてゐるものは、第五、第六窟の内層樓と、第七窟の三層樓のみであるが、嘗ては諸石窟の前面に殆んど架せられ、或は輪奐の美を競ひ、更に石窟風化の防止に役立つこと多大なるものがあつた。これ等樓閣の全面的再興は我々の最も理想とする所であるが、その實現は稍々困難に近いものがあると思はれる。然るに現存の樓閣は清初順治四年の創建に係り頗る壯麗なるものであるが、これ亦年久しく



態狀壞崩の部上口入窟二第 7 圖挿



るあで態狀るすとんれ倒に將今は壁前裂龜の井天窟十第 8 圖挿

能であるから、一應解體して修理することが適切であると考へる。

〔挿圖4参照〕

ロ、諸石窟に於ける戸窓の施設

諸石窟を検すれば、風化の程度は各壁面に於いては下層に多く、就中北壁が最も甚しいのである。これは主として地下水が窟内に浸透して、それが冬季、低温なる外氣に遇つて凍結し、そのために岩面の剥落を招いた結果に基づくものである。従つて冬季、外氣の侵入を防ぐ手段として各窟の入口及び窓に扉、障子を設けることは、洞窟前に樓閣を架することと比較すれば第二義的ではあるが、この際最も必要である。而もこれは決して風致上、美觀を害するものではない。蓋し樓閣の失はれた後に於いては、前清時代までかゝる施設を伽藍的裝飾の意味に於いても行ひ來つたのである。現に第八、第九、第十、第十三の各窟の如きには障子骨が残つてをり、その他の諸窟に於いても亦棧孔が認められる。この種の施設は最も簡便であるから取敢へず復活して有効なるものと信ずる。

A、舊棧孔をその儘利用し得るところ。第十一窟、第十三窟及び第十六窟より第十九窟に至る各明窓。

B、アーチ等を築造してこれに附設すべきところ。第一、第二窟及び第九窟より第十九窟に至る各入口。

ハ、第八窟前樓閣の再建

第八窟前面には、他の樓閣と同じく清初、前代の遺構を踏襲して第七窟と一對をなす三層の樓閣が架せられたものであるが、惜しくも早く倒

大同石佛寺の保存に就いて

壊した。その結果石窟内部の風化も第七窟に比べて遙かに進んでゐる。

蓋し同窟は第七窟と共に中央諸窟中、開鑿最も古く且最も優麗なる一雙窟であり、従つてこれに樓閣を架することは、たゞ石窟保護の目的に合するのみならず、また美觀上からみても缺くべからざることである。その様式は第七窟と同じく木造、瓦葺の三間、三層とすべく、再建の經費も比較的巨額を要せざるものと信ずる。然し更に經費に餘裕ある場合、兩窟とも尙一層規模の大なる樓閣を架することが出来れば理想的である。

附、石佛寺建築物の重修

山門、天王殿、鐘樓、鼓樓及び觀音閣の重修。客殿の改裝。〔挿圖5参照〕

門前より本殿に至る間の鋪石、階段の修理。

一、石造建築に關する事項

石窟の開鑿されてゐる岩層は、岩質脆弱なる砂岩質であつて風化を被りやすい。しかのみならず、當地の氣候は最も寒暑の差が甚だしく、酷暑には華氏百度以上に昇り、酷暑には零下二十度にも降ることが稀ではない。従つて長き年月の経過の爲、現在の如き有様を呈するに至つたものである。若しこれを其の儘放任して顧みないならば、將來に於ては加速度的破壊を招く懼れあることは云ふまでもなく、直ちに可急的保存策を講じて風化を豫防し、崩壊を未然にとゞめなければならぬ。即ち岩石の硬化法を考究し、或は岩層脆弱部分に詰石し、更に屋根を架し其の

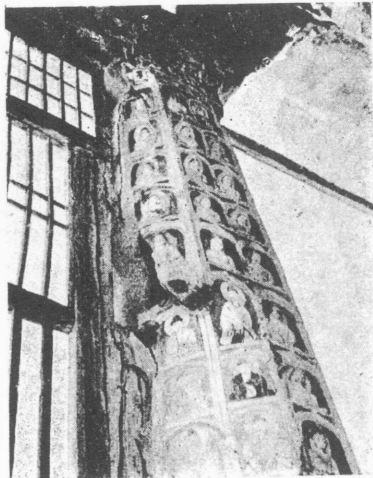
他の被覆施設をなして風化防止策を講ずる必要がある。又既に龜裂を生じ、或は崩壊を來した個所に就いては支柱を設け、石を以つてアーチを組み、錠をかひ又は鐵環を嵌むる等これに對する補強策を行ふを適當とする。以下各洞窟に就いて補修箇所細目を舉げれば左の如くである。

挿圖9

第十窟前室の崩壊状態左には天井の龜裂の一部が見えその前壁は既に落下して居る



挿圖10 第十窟前室石柱の崩壊状態



A、第一窟、同窟は地下水湧出多量なるため、隣接の第二窟と共に風化を受け龜裂を生じたる部分甚だ多く、特に前壁明窓の下及び第二窟との隔壁には大なる龜裂を生じて居る。又前壁下層部の如きは著るしく風蝕して、上層の重壓に耐えず、將に倒壊を來さんとするの状を示して居る。

更に窟内の塔柱に於ても北側の風化が激しく、補強施設の遂行尤も必要なるを覺えしめる。これが對策としては、外壁面に石壁を作りアーチを設け、下層の風化部分に詰石を施し、或は隔壁の龜裂

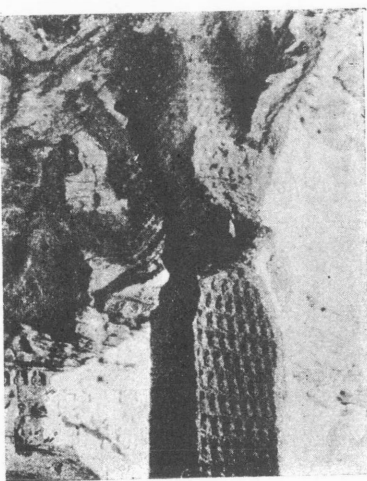
部を充填してその倒壊を豫防し、更に塔柱の北側には支柱を設けてより以上の風化を防ぐべきである。〔挿圖6・7参照〕

挿圖11

第十二窟入口の崩壊状態前面にあるのは上部から落下した岩石である



挿圖12 第十四窟千佛を刻せる石柱の上部



一面、他の諸窟とも位置がかけ離れてゐるので、新たな施設を加へるのに最も適宜である。又窟の規模も比較的大きくないので、その經費も多額を要しないものと信ずる。

B、第五窟 同窟と第六窟との隔壁には上下に互つて大なる龜裂があり、又現在は泥土を以て被覆してあるが内部には巨大なる空隙を生じてゐる。これには詰石の如き適當なる方法を講ずる必要がある。

C、第八窟 同窟に就いては、木造建築の項に於いて樓閣再建の計畫を述べたけれども、若しその實現が困難な場合には、第二義的方法として南壁外面に適當なる石組の一壁を組み、入口と明窓とはそ

れに應じたアーチを開くべきである。

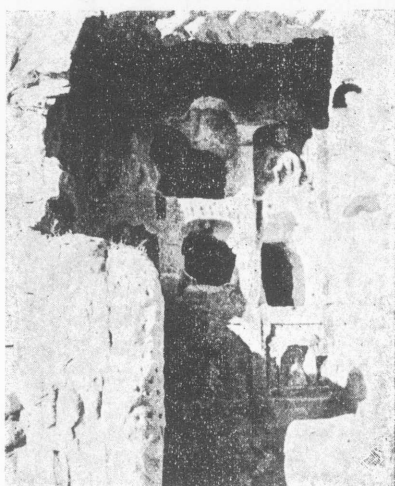
D、第九、第十窟。兩窟は各前室の天井に、東西に互る大龜裂があつて、一部分は既に剝落してゐる。而もこの重量を支へてゐる前面の石柱は風化が全面的に激しく、その重量に對する負擔能力は頗る弱いのである。従つて現状の儘に看過することは到底許されない。先づ一案として、石柱補強のために、更に鐵骨コンクリートの支柱〔バトレス〕を造り、該龜裂部分には漆喰等を充填するを可と考へる。或は鐵製の銚をかひ、或は鐵環等を嵌める等も考慮されないではない。しかし、上記の諸案は悉く石窟の美觀に對して深い關係を有するものであるから、勿論果斷に俟たねばならないが、一面甚だ慎重を要するものである。支柱〔バトレス〕使用の場合には、外部は石を組んでこれを被ひ、その外貌を整へる様な方法もあるであらう。〔挿圖 8、9、10 參照〕

E、第十二窟。同窟は第九、第十兩窟が漸く崩壞に瀕してゐるに對し、

挿圖13 第十四窟千佛を刻せる石柱の下部 脚部には適當な詰石を施し上部には鐵輪等をはめるべきである



挿圖14 第十六窟外窟の崩壞狀態 大きな穴は人爲的破壊の跡である



既に崩壞の一步を踏み

出し前室外壁の一部は落下してゐる。故にその補強策は前者に準じて、同様火急なるを要するわけである。なほ同窟と第十三窟との隔壁には岩石の龜裂、崩壞のために大なる空隙を生じてゐるが、これが補強對策も第五、第六窟の場合と同様である。〔挿圖11參照〕

F、第十四窟。同窟は既に前壁は落下し形を残さず、現在残つてゐる

千佛を刻した石柱の如きも、上下に著しく風蝕を被り、下部には大なる龜裂を生じてゐる。従つて若しこの儘放置するに於いては近き將來に於いて前者の轍を踏むべき運命にあると考へられる。若しこの石柱が倒壞すれば、同窟の天井は忽ち落下するであらう。石柱の補強としては、風蝕部分に詰石を施し、龜裂部分には鐵環を嵌むる等の策を講じなければならぬ。〔挿圖12、13參照〕

G、第十五窟。同窟の天井には著しき龜裂があり、その一部は今にも落下せんとする岩石を、現在は細き木柱を以て辛うじて受止めてゐるが、危険に付き、至急他の強力



挿圖15 第十八窟入口上部の崩壞狀態

なる支柱と取換へる必要がある。

H、第十六窟。同窟は外壁面に石造の一壁を作り、入口にアーチを開いて壁面の保存を計るべきである。なほ、同窟の附屬石窟は前壁が崩壊してをり、これをその儘放置するに於いては、その影響が背後の第十六窟にも及ぶ恐れがある。従つて前面に石壁を組み入口を作つて石窟の形態を整へる必要がある。〔挿圖14参照〕

I、第十七窟。同窟は入口及び天井の龜裂を生じた部分に、これが落下豫防策として鐵梁等を設けること等が考慮される。又、北壁下部は常に地下水の浸出あるがために岩層に無數の小龜裂を生じ刻々剥落しつゝある現状である。これが對策としては本尊臺座の兩側より後部を貫く隧道を鑿てば、浸水の漏出を排除して岩層の崩壊を防ぐことが出来ると思はれる。第五窟及び第九窟の各本尊の背後に鑿たれた廻廊式隧道は、固より石窟莊嚴の意味に於いてなされたものではあるが、今日よりみれば、これが爲めに浸水を除き窟内の岩壁を乾燥せしめ、以て風化を防ぐに大いに役立つものである。なほ、第二十窟の露佛兩側から鑿たれた隧道も後世のものではあるが、これ亦岩面の乾燥を助け風化を豫防する結果となつたことは前者と同様である。

K、第十八窟。同窟は入口上部の崩落が著しいので、前面に石造のアーチを築いて、至急これが補強策を講ずる必要がある。なほ入口下部の岩層風化部分及び内壁の脆弱なる岩層部分には詰石等の工作を行はなければならない。〔挿圖15、16参照〕

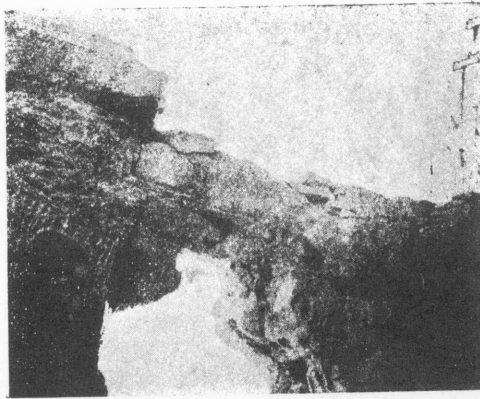
L、第十九窟。同窟の入口部分及び前壁裏面の風化崩壊狀況は第十八

窟と殆んど同様であるから、その補強策も亦これに準すべきものである。但し、本尊の膝下に當る岩層に著しく脆弱なる部分があつて恰かも剔り取られたるが如き有様を呈してゐる。又外壁の一部にも脆弱なる岩層が露出してゐて、右脇窟の前壁の如きはそれがために早く倒壊したのである。従つて、これ等の箇所には詰石を施してその落下を豫防しなければならない。なほ同窟も、第十七窟程地下水の浸出程度は著しくないけれども、豫め本尊の背後に隧道を鑿つてこれを防ぐ必要が認められる。〔挿圖17参照〕

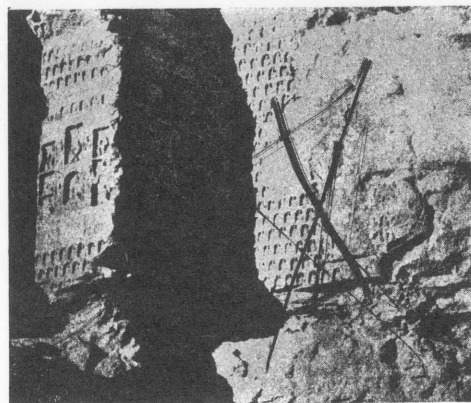
M、第二十窟。同窟は元來他の諸石窟と同様、前壁を有し洞窟を形作つてゐたものであるが、基部に脆弱なる岩層があつたために相當古い時代に於いて倒壊し現在の如き形となつたものである。さて露佛は胸腹部にかけても此の種の岩層があらはれてゐるので、或時代に於いてこれを剔りとり衣紋を彫刻せる切石を嵌め込んだものである。その後詰石は殆んど脱落してしまひ、現在では煉瓦や泥土等を以つて充填し甚だ美觀を損じてゐる。この部分に用ひたる詰石は今次の調査に際して多數地中から發見せられた。これ等の石をそのまま再び用ひて舊形に復し、その足らざる部分を補ふか、或は全然改めて熟練せる石工をして適當なる詰石を施さしめれば、補強上からも美觀上からも最も適宜なるものである。〔挿圖18参照〕

又露佛の鼻頭がやゝ風化し始めてをり、加ふるに今次の發掘によりその膝部以下を露出するに至つた結果、下部は一層直接に風化を被る憂が多くなつた。この對策に就いては輓近の科學的精華による岩石硬化法の如きも、専門家に依頼して考究しなければならぬ。更に

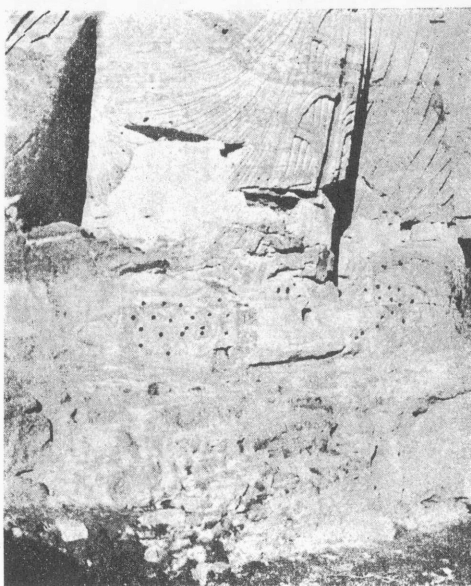
露佛頂上に當る部分には煉瓦を積んで嘗ては壁面の風化崩壊を保護してゐたものであるが、現在は却つて煉瓦自體の崩壊が危懼せられる様になつてゐる。若しこの儘放任するに於いては、不時の危難なきをも保し難い故、至急對策を講じなければならぬ。同時に露佛顔面に直接雨露を被らしめないため、上部に庇風の施設を加へることは是非必要である。露佛前の基底部等には上述の如き缺陷のある岩層が全面に露出してゐるから、煉瓦又は切石等を用ひ鋪裝して保護



16 圖挿
見りよ部内を態狀壞崩の部上口入窟八十第
製木はに分部裂龜で部一の窓明は上右る
るあてし施を石詰はに分部弱脆ひかを樑の



17 圖挿
るゝか 分部弱脆層岩の窟脇右窟九十第
必るす講を策強補てつかを石詰はに分部
るあが要



18 圖挿
し著及分部弱脆層岩の部腹佛露窟十二第
や瓦煉はに者前 態狀化風の下以部膝い
端の袖左の衣着 るあてれま込め墳が泥
所各 る居てつ残がつ一の石詰の時舊に
杭にれこ時の修補像佛は孔る居ていあに
るあで跡たせたをも泥てつうを

全面的の崩壊を來す懼れがある。従つて最少限現狀を維持せんがためには、廣範圍に亘つて岩層の脆弱なる箇所全面に詰石を施す必要があり、又鐵骨コンクリート支柱を設け上部岩層の崩落を防止すべき箇所も少くない。西方塔窟前壁西側の如きは最も可急を要するものである。而もこれ等諸窟に於いては石工と石材、混凝土等の材料さへあるならば、必ずしも特殊の技術を必要とせず、工事は比較的容易であると信ずる。〔挿圖19、20、21參照〕

しなければならぬ。

N、西方小石窟群。同窟群はその規模は小であるが、全體の配置は特に複雑不統一であつて、且つ下層部に當り最も脆弱なる岩層が厚目にあらはれてゐる。そのために下部を剔りとらるゝが如き形情を呈し、上部の重壓に耐へきれず、既に崩壊してこれに對する方策の施し難い様な箇所も少くない。しかしこれをその儘放任すれば、結局

大同石佛寺の保存に就いて

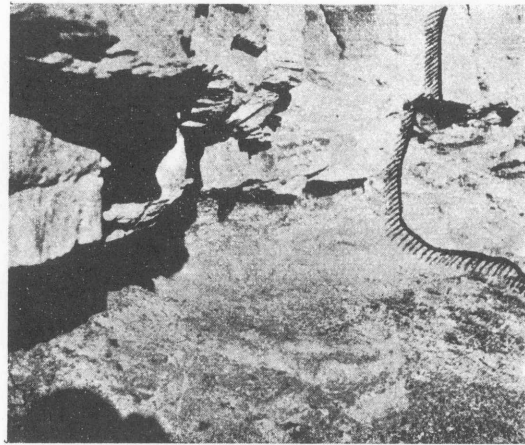
附記、岩石の崩壊防止に使用すべき混凝土、漆喰等の如き物質は、岩石との伸縮の比率によつて効果に影響を及ぼすことが頗る大であるから、豫めその専門家に依頼して研究をしなければならぬ。

一、其の他

イ、排水施設

浸水には地下水の浸透によるものと、降雨等による直接のものとがある。何れにするも、浸水は石窟風化の最大原因をなすものであるから、これが豫防策の必要なるは言を俟たない。地下水浸透の防止に就いては、已に石造建築の項に於いて洞窟の背後に隧道を繋ぐ等の方法を述べたけれども、更に大規模なる工事としては、石窟の背後全體に互つて一大排水溝を掘鑿することである。これは石窟の前面と平行して東西に連るものであつて、その結果石窟は地表から凸字形をなして臺地より獨立することとなり、地下水の窟内に浸透するのを排除することが出来る。しかし、これは頗る大工事であるから、これが實施に先立ちては地層や岩層に就いても豫め充分な調査を行はねばならぬ。

雨水防止としては石窟の上部をセメント、又は漆喰等を以て固め傾斜面を造り、且つ適當なる溝を設けて排水を速かならしめなければならぬ。又石垣を積んで雨水の石窟前面に落下するを防止する方法もある。後者は既に古くより施行せられて居り、嘗ては雨水防止のみならず、石



19 圖挿
西小方石窟群に於ける岩層脆弱部分断面圖
にあらはれたる部分には是非とも石詰し施すべし
上部の層部を防止するがねばならぬ

壁上層の保護にも役立つて居たものであるが、現在では年久しく補修を経ない結果、全面に互りその用をなさなくなつて居る部分が少くない。特に第十四窟より二十窟に至る部分、或は第七窟上部の排水装置、就中前述の第二十窟上部の如きは至急これが補修を行はねばならない。而もこれ等は必ずしも多大の經費を要せずして効果の少なからぬものである。猶嘗て埋没した窟内を掃除した結果、近時雨水の流入するものがあるか



20 圖挿
西小方石窟群の崩壊状態 下部岩層脆弱なるを柱支かを爲るに上部の佛龕が落下し居る 一箇所の例

ら、各窟前を掘下げ溝を設け、その排水を速かならしめる必要がある。この點に關しては本年度に於て既に一部分の行事を實施したのであつた。

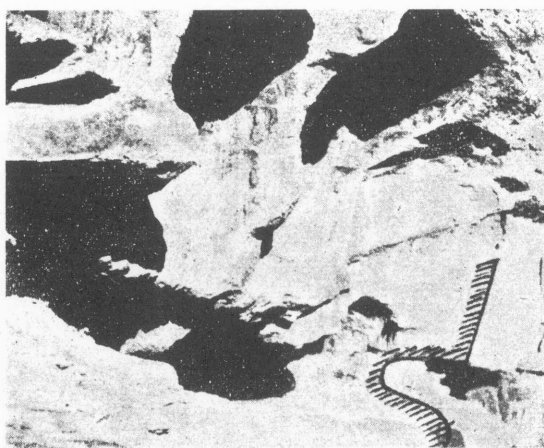
ロ、石窟内の床の鋪裝

窟内の床は現在一部分は煉瓦又は切石を以つて鋪裝されてゐるが、何

れも不完全なものである。嘗てはその表面を平かにし、或は鋪装したものであるが、現在では磨滅して著しき凹凸を生じ、又は深く土砂の埋没するところとなつて居る。後者の場合は最近一部分の排除を行つたが、その結果更に全面に亘り、煉瓦又は切石を以つて鋪装す可き必要が認められる。但し、床の鋪装に際しては窟内に濕氣を生ぜしめない工夫を講ずる必要があるであらう。

ハ、佛像の補修と色彩の更改

上述したところは總べて石窟全體の保存に關するものであつたが、尙個々の小佛龕や佛像に關しても同様注意が拂はねばならぬ。例へば、



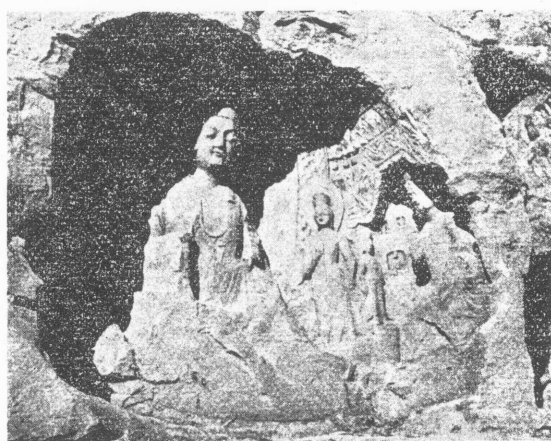
21 圖挿
西方塔窟入口崩壊状態 下部は岩層の脆弱な
るが爲に断面の如く別れて居る下の黒い大
部の風蝕甚しく既に外部から窟内に達する

第七窟奥壁上龕の交脚像の左腕は極く最近に剥落したものであり、又一兩年前までは頗る完好であつた第十一窟外壁佛龕の交脚像の左頬が剥落して、生々しい痕を見せてゐるが如きである。かゝる類例も窟全體を通じて見れば少くなく、その補修によつて永く麗しい姿を傳へることが出来る筈である。これに就いては頗る繊細なる技術を要するものであり、而も未だ細部に互つた調査は完成してゐないので、こゝに項目を擧げる

大同石佛寺の保存に就いて

に止める。〔挿圖22参照〕

なほ、色彩の更改に就いては、近世に於ける拙劣なる附彩は時に俗惡なる雰圍氣を起さしめる部分も少くない。従つてかゝる部分はより高き藝術的良心によつてこれが更改をなすべき必要があると思ふ。しかし、これ等のものも信仰心の現はれとして支障なき限り尊重したい。



22 圖挿
第十窟外壁佛龕 向つて右の交脚像の左頬は
この一兩年中に剥落したものであつた

(2) 観光その他に對する施設

イ、第一次計畫

A、現史蹟指定區域内に於けるもの
整地、植樹（殊に東方石窟群及び西方石窟群一帯を樹林地帯とする）、觀光設備の充實、管理處の整備。

B、風致保存區域の設定（石佛寺を中心として略々四軒四方に互るもの）

C、石窟上部臺上土地の買収

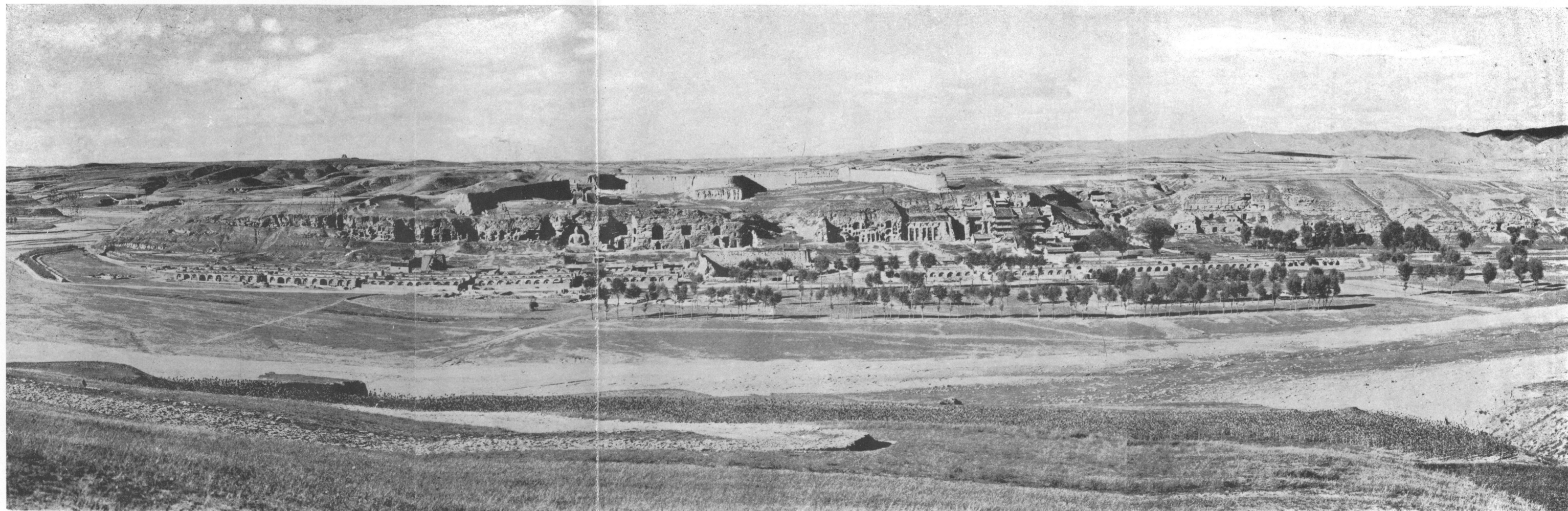
ロ、第二次計畫

風致保存區域内に於ける各種施設の充實。

結 語

以上、緒言に於いては簡単に石佛寺の歴史的経過とその史蹟としての性質を述べ、次いで、これが現状と保存の必要とに説き及んだ。而して個々の破壊状態に就いて少々詳細なる説明を加へ、大方の注意を喚起すると共に、これが保存事業に對する意見の具體化として、保存計畫私案なるもの、作成をも試みたのである。緒言にも一言した如く、我々は勿論この方面に對して専門的な知識を有するものではなく、又専らこれに關する調査のみに従事したわけでもないので、この計畫案なるものは固より充分なものではない。殊に一々の細部に亘つて數字的な記述を行はなかつたことは勿論、この方面に關する術語の使用法等にも缺くる點がある。又石窟全般に亘る配置圖を始め、一々の部分圖、就中、この種の計畫には缺くべからざる設計圖等をも作成し得なかつた。しかし、要するにたゞ我々の企圖する所は破壊箇所を指摘し、その保存事業實施の可急を要する點を強調するにあるのであつて、保存計畫案は寧ろ第二次的な意義を有するに過ぎない。しかも、敢てこれを發表する所以は、本石佛寺に就いて未だ具體的なこの種の計畫書の作成されたことを聞かないからである。冀くは、我々の意圖する所が一般に諒解され、本計畫私案なるものも、大方諸家の叱正を得て、將來に於いて立案さるべきより完全なる計畫の一助ともなれば、喜びこれに過ぐるものはないのである。

本文中保存計畫私案に關する部分に就いては水野清一氏の助言を得た點があり、なほ挿入の圖版は晋北政廳弘報科平原技師を煩したものである。一言記して感謝の意を表する。



大 同 雲 崗 石 佛 寺 全 景